松本清張『砂の器』

― 日本近代の欲望と犯罪 ―

綾目広治

一

『砂の器』（一九六〇～一九六一）の中の重要人物であり、ヌーボー・グループの一人である評論家の関川重雄は、彼の愛人でバーのホステスである三浦恵美子に向かって、やはりヌーボー・グループのメンバーである作曲家の和賀英良が、保守党の有力者である田所重喜の娘の佐知子と結婚することについて、その結婚は「政略結婚」[1]であって「和賀の気持ちの中には、そういう出世主義が潜んでいるんだ」と批判する。別の場面でも同じように恵美子に向かって、「和賀は出世主義者だ」と語り、「ぼくは奴のように、口先では新しいことを言いながら、実は、最も古い根性を持っている男とは違う」と見えを切る。そして「君がバーで働いている女だろうとなんだろうと、ぼくには少しもかまわないことだ」とも言う。

要するに、自分は世俗的な意味での出世亡者ではないということを関川は言っているのであるが、しかし、この関川はホステスの恵美子との関係が表ざたになることを小心なまでに恐れていて、引っ越しして間もない恵美子のアパートに行ったとき、同じアパートの住人の学生の所に来た若者に顔を見られたことを心配して、恵美子にすぐにまた引っ越しさせようとする。引っ越しして、まだふた月しか経っていないのにである。「和賀は出世主義者だ」と語ったのはその引っ越しの話の最中においてである。自分は和賀のような出世主義の「男とは違う」と言った、その舌の根のかわかぬうちに、恵美子にこう語っている。

> ある時期まで、ぼくは君に犠牲を強いなければならない。ぼくは、今どうにか世に出かかっている大事なときなんだ。ここでつまらない噂を立てられて、その出鼻をくじかれてみろ。今までの努力も、これからの希望もめちゃくちゃになる。
>
> 今が「世に出かかっている大事なときなんだ」というわけであるから、文字通りの出世願望である。『砂の器』の中でヌーボー・グループの連中はたぶんに戯画化されて描かれていて、この関川なども軽薄才子として登場しているのだが、しかし、それにしてもあまりに軽薄で不誠実すぎるのではないかと思われるところがある。また、出世主義を批判しながら、そのすぐ後で「世に出」る云々を言うわけであるから、「世に出」ることと出世が同じ意味であることぐらい

気づかないのだろうか（もちろん、この場合の「出世」は「出世間」という仏教本来の意味とは逆の意味である）、それぐらいの国語力でよく売れっ子の評論家が勤まっているものだ、と半畳の一つもちょっと入れてみたくなるだろう。斎藤道一は、『砂の器』のヌーボー・グループの連中について、「松本としては、このような連中を登場させることによって、今の世に時めく知的なプロフェッショナルたちに、いかに軽薄でうす汚くくだらない人間が多いかを、諷刺的に暴露したつもりにちがいない。だがこれでは漫画にもならない」[2]と少々辛辣な批判をしている。たしかに諷刺が効きすぎていると言えるかもしれない

たとえば作品のはじめの方でヌーボー・グループの連中が秋田の亀田にT大のロケットを見学に行くところがある。この見学は蒲田の事件と関係があるのだが、その見学の感想を関川は、「自然科学の前には、観念ははなはだ薄手なものだよ」、「正直に言って、科学の前には参ったという感じだ」と述べている。『砂の器』が連載されたのは一九六〇年から翌年の一九六一年で、この頃はまだまだ一般には素朴な科学信仰があった時代である。「科学の子」の鉄腕アトムのテレビ漫画もこの頃である（小説の中の物語も作品発表時とほぼ同時代と見なされる）。

しかしながら、科学批判をその思想の内に含んでいる実存主義はすでに知られていたし、その実存主義の母体と言えるフッサールの現象学も自然科学主義を厳しく批判する思想であって、戦前より日本の思想界には馴染みのある思想であった。さらに言えば、フッサールの中期の思想を受け継いだとされているハイデガーの哲学とくに解釈学的現象学は昭和初頭から三木清などに紹介され、戦前昭和の思想界や、また誤解を含みながらも文学界にも知られていた。ついでに言うと、ハイデガーの主著である『存在と時間』には自然科学的な考え方、いわば自然科学主義に対する批判が盛り込まれている哲学書である。

そういうことを考えると、芸術、思想の最先端を行っているはずのヌーボー・グループなのに、とりわけ関川はグループの理論的存在であるはずなのに、その関川が先ほどのような単純な科学礼賛を語るというのは、どういうことなのか、彼らはヨーロッパの現代思潮に通じていなかったのだろうか、一体、どこがヌーボーなのかと、これまた半畳を入れてみたくもなってくる。関川が書いた、和賀英良の作曲についての論説も、同様である。主人公の刑事の今西栄太郎が難しくて解らないと思ったその論説も、たしかに一見難解そうであるが、稚拙な文章であまり程度のいいものではない。やはり諷刺が強すぎるかも知れない。

いま述べたことは、とくに関川重雄に当てはまるのであるが、おそらく和賀英良などのその他のメンバーにも当てはまることだと思われる。ただ、後でも触れるが、和賀英良の内面、その心理、つまり何をどう感じ考えているのかということはわからない。そういう小説の方法によってこの『砂の器』は書かれていて、多くの場合、刑事の今西栄太郎の視点によって物語は展開していく。

このように諷刺あるいは戯画化があまりに単純で強すぎるのでは

という批判が出てくるのも故なしとは言えないというところが、この『砂の器』にはたしかにあると思われるが、しかし、ここで問題にしたいのは、和賀英良や関川重雄にある、ナイーブ（素朴、単純）と言ってもいい、その彼らの出世主義あるいは出世願望である。たとえば平野謙は、和賀英良や関川重雄に見られる、反俗主義と表裏一体となっている出世主義的な心性が、やはり過度にストレートに描かれていることに関連して、次のように述べている。

たしかに学問・芸術の世界も現世のミニチュアにたがわぬ側面を持っている、（略）世間を見返してやりたいという復讐的な希いのままに、現世の立身出世の代償として学問、芸術の世界をえらんだ人々の前には、いつまでたっても現世のミニチュアとしての学問、芸術の側面しか扉がひらかれないのではないか。[3]

これは「菊枕」（一九五三）や「断碑」（一九五四）について述べられているのであるが、平野謙は、「無意識的に学問、芸術の世界を現世の代償とみるみかたが逆輸入されている」（同）とも述べている。

しかし他方で平野謙は、松本清張の小説の主人公たち、とくに芸術家の主人公たちの立身出世意識が決して特殊なものでなかったことを、伊藤整のエッセイ「近代日本人の発想の諸形式」に言及しながら、認めている。つまり、近代日本の芸術家とりわけ文学者は、たとえ彼らが反俗的ポーズを採り、また彼ら自身もその反俗的姿勢を信じていようと、実は彼らの中にも立身出世意識が抜きがたくあったということである。平野謙は引用していない箇所であるが、たとえば伊藤整は、「近代日本人の発想の諸形式」の中で、こう語っている。芸術家は「スネ者、孤独者」として自分の芸に神秘的なまでに熟達した人間として社会に戻って来た時にのみ有能であって、「見出だされ、出世するのであり」、「そのような形において、近代日本の指導者たちを養成した立身出世思想は、文芸に生かされている」、と。さらに、「純粋芸術家という自負を持った芸術至上主義的作家によって、立身出世意識は描き出され、かつ青年を鼓舞したのである」[4]と。

たしかにそのような「立身出世思想」あるいは立身出世意識を近代日本の文学者に見ることは困難なことではない。なるほど、『砂の器』の青年芸術家たちの立身出世志向は、極端に描かれているところもあり、つまり彼らの抱懐する芸術思想と矛盾していて、かつその矛盾に彼ら自身が驚くほど鈍感であるということもあって、さきに言及した斎藤道一のような批判が出てくるわけだが、しかし、『砂の器』は日本の近代における青年芸術家たちのその本質をよく突いている小説であったと言えそうである。

また、平野謙は、「菊枕」や「断碑」などの主人公たちは「ついに現世のコンプレックスの呪縛からのがれられないで、あるいは狂気し、あるいは中道にして斃れるのである」として、「おそらくその前半生においてさまざまなコンプレックスになやんだにちがいない作者は、そういう彼らの悲劇性に共感を惜しまなかった」[5]と述べ、学問・芸術に生きている主人公たちの人間像があまりに立身出世的である点において一面的すぎはしないかという自分の批判を、自ら少

々和らげてもいるが、たしかにそうも言えるであろう。小説作者と主人公あるいは登場人物の何人かとは言わば〈臍の尾〉が繋がっている、と言われることがあるが、『砂の器』においては、とくに和賀英良に対しては、松本清張はその悲劇性にある種の「共感」、少なくとも同情を持っていたと思われる。

和賀英良の場合はその上に特殊な問題があり、そのことについては後で考えてみたいが、松本清張は実業人ではなく学者を主人公にする場合でも、彼らの胸底に立身出世思想あるいは上昇志向があることを描いた作家であった。たとえば「落差」(一九六一～一九六二)の歴史学者もそうである。そこに〈色と欲〉が絡んでもくる。〈色〉の問題はともかく、松本清張の小説の多くの主人公には立身出世や上昇志向のエートスに浸されたところがある。そしてその立身出世や地位の上昇を謀ろうとして無理をして、あるい立身出世のために自分の過去や出自を隠そうとして、主人公たちは犯罪を行うのである。『砂の器』はその典型である。

松本清張の小説が多くの読者を獲得したのは、もちろん犯罪のトリックの面白さや、官僚の汚職に見られるような社会悪を推理小説で追究する、平野謙の松本清張論の中の言葉を借りるなら「ヒューマン・インタレスト」(『松本清張短編総集』〈講談社、一九六三〉解説)の土台にある真摯さということもあったであろうが、おそらく一つには、この近現代の多くの日本人を使嗾してきた立身出世主義や上昇志向の問題を正面から取り上げたからではないか。もちろん、犯罪と関わる形で取り上げられているわけであるが。おそらく、多くの読者は自らの半生を省みて身につまされるところがあったのではないだろうか。それでは、次に松本清張の小説から離れて、立身出世主義の問題について少し考えてみたい。

二

社会学者の見田宗介は、すでに一九六七年に「「立身出世主義」の構造—日本近代の価値体系と信念体系」[6]という論文の中で、学校系列と官吏登用のルートとが「民庶」の比較的上層に対しての「現実の誘導水路」であったとするなら、「民庶」の下層に対しては「金次郎主義」—言うまでもなく、あの苦学しながら勉強するお手本の二宮金次郎の「金次郎」である—が「観念の誘導水路」としてあったと指摘し、「金次郎主義こそは、近代日本の立身出世主義の底辺を構成するものであった」と述べ、そしてこの「立身出世主義の全構造こそ、日本型資本主義の急速な発展をその方向に推進してきた内面的な動力であった」と述べている。よく知られているように、ヨーロッパにおいては、プロテスタンティズムの禁欲的倫理が資本家、企業家のいわば内面的な動力としてのエートスになって資本主義を発展させたというのがマックス・ウェーバーの有名な学説であるが、興味深いのは、見田宗介は立身出世主義としての「金次郎主義」が日本資本主義におけるプロテスタンティズムに相当すると述べていることである。もっとも、「金次郎主義」は何もプロテストしないわけだから、見田宗介の言うように、それは「プロテストなきプロテ

スタンティズム」（傍点・原文）ではある。

ここでは「金次郎主義」のことよりもその「金次郎主義」も含んでいる立身出世主義の方に注目したいのだが、見田宗介は、日本の立身出世主義の社会的な機能について、消極的には天皇制国家の内の矛盾を繕うことであり、積極的には支配層の要請にそって「「上からの産業革命」を推進する主体的な条件を用意することにあった」としている。こういうところから立身出世主義は明治以降の多くの人々の人生をいわば領導し牽引するエートスになったわけである。文学においても確かにそのことを見ることができる。

たとえば、日本近代文学の出発点に位置するとされている、有名な二葉亭四迷の「浮雲」（一八八七～一八八九）と森鷗外の「舞姫」（一八九〇）である。「浮雲」は立身出世しなければ恋が成就しない物語と言え、他方「舞姫」は立身出世を採るか恋を採るかという物語である。ともに前途有為の青年が主人公であるが、立身出世の問題が若者にとってほとんど強迫観念になっていたとも言えるほどに、大きな問題であったことを窺わせる。有名どころをさらに挙げるなら、若年時の国木田独歩もそうである、石川啄木もとくに初期においてはそうである（ただし、両者とも後にその立身出世意識から抜け出るが）。また、太宰治もそうである。たとえば、彼の最初の小説集である『晩年』の冒頭にある小説「思ひ出」（一九三三）の主人公である少年、これは太宰治その人と言っていいが、その少年は「偉くならなければ」[7]という思いに捉われている。太宰治は、たぶん自殺するまでその意識から抜け出ることが出来なかったと考えられる。

では、青年にとって立身出世のルートとは具体的に何かと言うと、要するにまずは上級学校に行くことであった。竹内洋は『立身出世主義　近代日本のロマンと欲望』[8]で、「明治以後の勉強立身は学歴／上昇運動である」と述べている。この「学歴／上昇運動」のルートに乗った青年たちの間で、旧制高校を中心にした、あの教養主義が花開くが、一方そのルートに乗れなかった人たち、すなわち「学歴貴族」以外の人たちにとっては、教養主義ではなく修養主義という、やはり立身出世主義の一ヴァリエーションがあった。

もちろん、教養主義も立身出世主義と深く関わっている。竹内洋は同著で、「教養主義の顕在動機が人格主義であり、潜在動機は立身出世主義である」と述べている。主に旧制高校に見られる教養主義について、竹内洋は『立志・苦学・出世』[9]の中で、高等教育を受けた青年たちは、正当な文化に同化しつつ、他方で民衆と差異化しなければならなかったが、教養主義とはその「同化＝差異化戦略」のことであった、と述べている。正当な文化への同化というのは、具体的には西洋古典を学ぶことであり、彼ら旧制高校生の教養の中身とは西洋古典のことであった。

ここで差異化というのは、自らの階層と民衆階層との間に差をつけることを言うわけだが、これはフランスの社会学者であるピエール・ブルデューの言うディスタンクシオンの理論―つまり階級、階層というものは、趣味その他を含めた生活様式において、他の階級、階層と差をつけようとすることによって、自分たちの階級のアイデンティティを保持しようとするという考え方である―そのディスタ

ンクシオンの理論[10]を思い起させる。実際、竹内洋の著書の参考文献としてピエール・ブルデューの本も挙がっているが、とくに上位の階級、階層にとって自分たちよりも下位の階級、階層に対して生活様式全般において差異をつけようとするのであるから、これは上昇志向、これまでの言葉で言えば立身出世意識と大いに繋がるものである。つまり、旧制高校生の教養主義とは、ディスタンクシオンの意識であり、したがってその「潜在動機は立身出世主義である[11]」と。

このように学歴エリートは、近代日本においては教養主義の世界にいたのだが、それに対して大衆は修養主義の世界にいたと考えられる。修養主義というのは、心身の鍛練と人格の向上を目指すもので、その修養によってやはり最終的には立身出世しようとするものであった。とはいえ、最終目的が立身出世にあったとしても、それを前面に出すのではなく、あくまで前面に出されるのは心身の鍛練と人格の向上の方である。しかしながら、では何故そういう鍛練をするのかと問い詰めてみるならば、やはり立身出世が目的なのである。そのあたりの曖昧さが—もっとも曖昧なのは教養主義もそうであるが—、とくにこの修養主義の持味であり、また臭みもあるわけである。

文学の世界で修養主義の端的な例を挙げるなら、吉川英治の『宮本武蔵』が、その修養主義の正負両面を、とくにマイナス面をよく表している小説だと言えよう。一体、何のために武蔵は刻苦勉励して修業をしているのか、剣において強くなることと、武蔵が目的としているような悟りを開くこととは、どう繋がるのか。もちろん剣禅一致という考え方も実際にもあるわけだが、しかし、吉川英治の『宮本武蔵』はそのあたりが曖昧である。宮本武蔵の、剣をめぐっての修業や試合の話は、江戸幕藩体制の成立によって、もはや剣の腕が勝れていることにあまり意味がなくなった時代の、その趨勢に取り残されてしまった就職浪人の、しかしそれでも剣以外には自分の特技を売ることのできない若者の就職活動の話であった、という面がある。

これに関連することを言うと、かつて桑原武夫が、吉川英治の『宮本武蔵』は大衆にどうして人気があるのか、どういうところがアピールするのかということを調べるために、聞き取りを含めての調査をしたことがあった。『「宮本武蔵」と日本人』[12]にその調査結果が載っているが、興味深いのは、聞き取り調査に応じた『宮本武蔵』ファンの人たちには、やはり修養主義のその曖昧さが受けているらしいということである。立身出世主義を核に持ちながら、それを人格修養というモラルで包んで語られているところに、大衆にとっての『宮本武蔵』の魅力があったと言えようか。

このように学歴エリートは教養主義の世界で、学歴エリートコースに乗れなかった人たちは修養主義の世界にいたという住み分けが出来ていたのが、日本の近代社会であったと言えそうだが、しかし、筒井清忠も述べているように[13]、このような住み分けは明治時代には無く、明治時代には全体に修養主義的エートスが支配的であった。その住み分け、分化がはっきりしてきたのが明治の終わりから大正時代にかけてである。それは、ちょうど、旧制高校、旧制帝国大学

などの学制の整備が一応完了した時期と重なり、面白いのは、この時期がまた文学の世界でも、いわゆる純文学と大衆文学とが分化する時期でもあったということである。つまり、大正時代には、高学歴-教養主義-純文学という系列と低学歴-修養主義-大衆文学という系列とが、はっきりと分かれてくるのである。おそらくこの時期あたりが、日本の近代社会の一つの転換点だった、とくに階層、階級という面での転換点だったと考えられる。

そのことはともかくとして、修養主義であれ教養主義であれ、その核心部分にはやはり立身出世主義思想があったわけで、それが日本の近代におけるエートスであった。先に触れた、見田宗介の説によると、西洋資本主義社会におけるプロテスタンティズムに相当する、日本近代におけるエートスであったのだが、もちろん高学歴-教養主義のコース、すなわち学歴エリートのコースに乗る方が立身出世において圧倒的に有利である。しかしながら、家の経済状態や親の文化資本（たとえば端的には親が高学歴であることなど）の貧しさによって、上級の学校に行けない青少年はどうしたのか。そういう青少年の中には、何とか上京して苦学して大学卒の資格を獲得する人も稀にはあったようである。たとえば吉川英治は上京して学歴資格を取ることはできなかったものの、苦学して成功した立志伝中の人であるが、しかし、こういう成功は稀な例である。上京＝苦学するルートさえ開かれていない、地方の貧しい多くの少年には、どういう道があったかと言うと、中学講義録で勉強するという道があった。これは中学教育を独学する者のための通信教育である。

さて、話を松本清張に戻すと、清張もこの講義録を取り寄せて勉強していたのだが、清張は『半生の記』（一九六三～一九六四）の中で、川北電気の給仕時代には中学校に入った小学校の同級生に途上で出遇うことが辛かったこと、また、「早稲田大学から出ている講義録を取ってみたり、夜の英語学校に通ってみたりした」と述べている。そして、「意志の弱いためにどちらもモノにならなかった」と語っている。早稲田から出ていた講義録は有名だったようで、清張もそれで勉強していたのである。ただ、清張自身は「意志の弱いためにどちらもモノにならなかった」と言っているが、しかし、意志の強弱に関わりなく、講義録で中学卒業の資格を取ることはほとんど絶望的に困難であった。先にも言及した『立身出世主義　近代日本のロマンと欲望』の中で竹内洋は、こう述べている。

……大半の田舎青年にとっての中学講義録は、実は体よく野心をあきらめ（クール・アウト）させるものだったのではなかろうか。（略）講義録は結果からみれば加熱された人々を加熱の世界におきながら、徐々にかれらの頭を冷やしていく巧みなクーラーだったということになる。(14)

『半生の記』を読むと、まさに松本清張がその後クール・アウトされていったことがわかる。倉田百三の『出家とその弟子』の朗読会に行ってみたものの、そのグループは「小学校卒、会社の給仕という、自分ながら最下層にいる者にはとてもよりつけないと考えていた」ということがあったり、また、朝日新聞社に入ってから考古学に興味を持ち出だし、北九州の遺跡を歩き回ったりしたときには、

「憂鬱な気分が一日でも忘れられ」たりするが、「だが、それも一時の気休めでしかない」と思うようになり、新聞社の東京商大出の社員に「そんなことをしてなんの役に立つんや？」と言われてショックを受けたりする体験を重ねながら、学歴エリートが幅を効かす立身出世主義の社会で、松本清張はやはり段々とクール・アウトされていったと言っていいであろう。もちろん、完全に冷却されてそこに留まるということがなかったからこそ、後の松本清張があるわけだが。

ところで、日本近代の社会は能力主義が基本であって、たとえばイギリスのような歴然とした階級、階層の社会ではなかったということが言われることがあるが、しかし、それは完全な虚像とは言えないまでも、その能力主義の話は大幅に割り引いて考えなければならないようである。最後まで課程を終了する者は極めて稀であったという、旧制中学の講義録の例に見られるように、本人の能力を超えた、出自その他の環境によって、あらかじめ限界づけられていたという面が厳然と存在していたのである。それについて、竹内洋は『学歴貴族の栄光と挫折』の中でこう述べている。

> 日本の学歴貴族の補充層の裾野は広かったという能力主義にもとづく社会的流動説は過剰な印象論であり、現実は社会的再生産モデルの部分がかなりあったこと、にもかかわらずこのような現実が認識されにくく、社会的流動モデルのイメージが強かったということになる。(15)

つまり、学歴エリートは学歴エリートの家庭で再生産され、非学歴エリートは非学歴エリートの家庭によって再生産される傾向が、近代日本社会においても厳然とあったということである。もちろん、その傾向からはみ出る部分もあったことは言うまでもない。極端な例だが、田中角栄などはそれからはみ出て成功した最たる例であろう。あるいは、非学歴エリートの家庭で生まれた者が何とかして学歴エリートのルートに乗るという場合もあったであろう。何としてでも立身出世街道を進むためにはそのルートに乗らなければならないわけである。その場合、自らの出自を隠してルートに乗るということもあったであろう。『砂の器』の和賀英良がそれである。回り道をしたが、『砂の器』に戻りたい。

三

和賀英良について見る前に関川重雄について、もう少し見ていこう。刑事の今西栄太郎の手帳には、関川の履歴がメモされている。それによると、関川重雄は、昭和九年に生まれているが、翌年の昭和一〇年に父親が死に一二年には今度は母親が死んでいる。兄弟はなく、秋田県横手に生まれたが、幼児に東京の目黒に住んでいた人に引き取られ、高校、大学とも東京で、R大学卒ということになっている。引き取られた経緯などは不明のようである。この略歴を見ても直ちにわかるように、関川重雄は大学卒ではあるが、大学が大衆化する以前の時代の多くの学歴エリートたちがほとんど中流階級以上の出自であるのに、彼はそうではないらしいということである。

履歴に不明なところもあり、どうも関川重雄は知識人エリートとしての通常の階梯を登ってきたのではない。つまりは成り上がってきたタイプの評論家らしいと考えられる。幼くして両親と死に別れていることから、決して恵まれた環境の中で育った青年ではないと言えよう。その意味で和賀英良と似ている青年知識人である。這い上がってきた人間である。

ところで、小説の初めの方で蒲田の事件の捜査のために、今西栄太郎は若手の刑事である吉村弘とともに秋田の羽後亀田に行き、そこで不審な男がいたという情報を得る。しかし、それは後になって犯人（すなわち和賀英良）の言わば陽動作戦であったことがわかるのであるが、その出張のときにT大のロケットを見学に来たヌーボー・グループの一行と出合う。このロケット見学旅行は、陽動作戦がちゃんと遂行されているかどうかを確認する必要のあった和賀英良が、そのために仕組んだ見学旅行だったのだが、ヌーボー・グループの一行を見た吉村弘は、帰京の列車の中で今西の顔を見て、今西の育ち、幼い時の環境がわかるような気がして、こう思う、「それからみると、さっき駅で見かけた若い人たちは、ずいぶん恵まれた環境だった。いずれも良家の子弟なのである。そのいずれもが揃って大学教育を受け、不自由のない生活を過ごしてきている」、と。

しかし、関川重雄については、大学教育はともかくも、けっして「良家の子弟」ではなく、「恵まれた環境」で育った青年ではなかった。和賀英良もそうである。貧しい生育環境から伸し上がってきた若者が、あたかも「良家の子弟」のように見られる存在になっていく、言わばその落差の中から犯罪が引き起こされる物語、それが『砂の器』であった。

さて、関川重雄がブルジョアや俗物を批判しながらも、彼自身に極めて俗っぽいところがあるという、自分の中にある矛盾に対して無自覚なところなどは、先に言及した斎藤道一の言うように確かに少々「漫画」的であると言え、その点松本清張の人物造形にやや難があったというふうに言えなくもなくもないが、しかし、野心的であることに対して、照れもなければ屈折した自意識もないというのは―そういう人物が松本清張の小説には多いが―、関川重雄の生い立ちを考えると、むしろ当然かも知れない。教養主義と修養主義ということで言うなら、彼はどちらの世界にも入らないタイプの人間だったのではないだろうか。学歴エリートたちの教養主義は、両親を幼くして亡くした彼のような、言わばハングリーな成り上がりの青年にとってはピンと来るものではなかったであろうし、また、修養主義も彼のようなインテリには無縁だったであろう。

関川重雄はギラギラした出世願望を持った青年知識人である。もっとも、教養主義も修養主義もすでに述べたように、その核心部分に立身出世主義を持っているが、それを前面には出すことはしないのである。教養、修養の観念でそれを包んでいる。しかし、教養主義とも修養主義とも無縁だったと考えられる関川重雄は、出世願望を無自覚にではあるが、前面に出す。そのように無自覚でそれを前面に出したりするところから、なるほど「戯画」的に描かれすぎるというふうな批判が出てくるのもわかるが、実はそういう感想を持

つのも、その人が教養主義的なエートスの中で育った学歴エリートだからだ、というふうに言えなくもない。

つまり、関川重雄は、高学歴—教養主義のタイプでも、低学歴—修養主義のタイプにも入らない、第三のタイプと言えるかも知れない。本来なら低学歴—修養主義のコースで人生を歩むはずだったのに高学歴—教養主義の世界の住人になってしまったタイプというふうにも言えよう。その意味で第三のタイプである。と言っても、彼も立身出世主義の感性を持っている、しかも強烈に持っている点においては、近代日本の立身出世主義エートスの空気を存分に吸っている人物であることには間違いない。彼自身がそうであるからこそ、和賀英良の中にある立身出世主義を嗅ぎ付けて手厳しく批判するわけである。冒頭で引用した箇所で、関川重雄は三浦恵美子にこうも言っている、「和賀はあれで相当、野心家だから、本当に彼女（婚約者の田所佐知子—引用者）を愛しているかどうかわからない。彼の狙いは、やはり田所重喜であり、それをバックにした自分の栄光の道だ」、と。

たしかに、このような関川重雄を見ると、果たしてこんな奴がいるのか、少なくともこういう青年が評論家として成功しているというようなことがあり得るだろうかとも思われるが、しかし、彼のギラギラした立身出世主義的心性を私たちは嗤うことはできないだろう。因みに旧制高校生は、そういう立身出世主義を軽蔑したが、竹内洋が『学歴貴族の栄光と挫折』の中で述べているように、「旧制高校生は帝国大学をつうじての出世コースがみえていたからこそ、実利や名利を否定する姿勢をとることができた」のである。たとえば旧制第一高等学校の逍遥歌に、「栄華の巷低く見て」という一節があるが、そういうことが言えたのも、実は彼らが「栄華の巷」によって保護され、「栄華の巷」から恩恵を受けていたからだったと言えよう。

また、「実利や名利を否定する姿勢」をとりつつ、他方ではその「潜在動機」に立身出世主義を隠し持っている教養主義の文化に浸っていたのが旧制高校生たち学歴エリートであり、彼らもやはり矛盾する心性を内に持っていたわけである。こういう矛盾の在り方は、ブルジョア的なものや出世主義を批判しながらも、その実自らも立身出世主義の道にしがみ付いている関川重雄や和賀英良などのヌーボー・グループの連中と、本質的には変りないのである。そう考えると、ヌーボー・グループの連中とくに関川重雄や和賀英良の人物像は、たしかにやや戯画的すぎるにしても、近代日本の知識人の典型を表していると言えるし、また、立身出世主義エートスそのものを体現している若者たちであったとも言うこともできる。彼らは正当化されたルートからではなく、それから外れた位置からはい上がってきたところが特殊なわけであるが、特殊な存在はかえって本質を具現することがあるということが言えるのなら、彼らはまさにそういう存在だったと思われる。和賀英良には、さらに特殊な問題があった。

その和賀英良については今西栄太郎のその後の調査でかなりのことがわかってくる。一応纏めておくと、本名は本浦秀夫で、幼いと

き彼は、ハンセン病となった父の本浦千代吉とともに、遍路姿で流浪の旅を続けていたが、昭和一三年に島根県の亀嵩でそこの駐在所の巡査であった三木謙一に保護される。三木巡査は千代吉の病が末期症状だと見て、彼を岡山県のハンセン病の施設に隔離し、息子の秀夫を引き取るが、秀夫はやがて亀嵩を脱走して大阪方面に行き、おそらく誰かに拾われて育ったらしいのだが、そこのところは今西の調査ではまだよくわかっていない。わかっているのは、戦争下の空襲で焼失した戸籍原簿が戦後の昭和二四年になって改めて作成された時に、本浦秀夫が和賀英良という名で届けられているということである。つまり過去の痕跡を消して、別人に生まれ変わったわけだが、その後、かれは京都府立の高校に行き、東京の芸大に進学し、作曲家として若くして異常な成功を収めて音楽界のホープになったのである。

本浦父子に善行を施したと言っていい三木謙一が、ある日、和賀英良の目の前に現われる。今西刑事の報告では、その面会は「秀夫にとって一大恐怖でございました」とあるが、たしかに、三木謙一の出現は、ハンセン病の父を持っていたこと、経歴を詐称していたことなど、そういう過去と一切絶縁したかった和賀英良にとって恐惶を齎らすような出来事であったであろう。

ところで、『砂の器』では忌まわしい過去の甦りが犯罪の引き金になるのだが、興味深いのは、純文学論争の中で論者によく言及されたのが、松本清張と水上勉の社会派ミステリーだったことである。その水上勉の社会派ミステリーの代表作の一つに『飢餓海峡』があるが、これは『砂の器』とほぼ同時期の小説で（一年遅く、一九六二年に出版されている）、この小説も忌まわしい過去が甦ることが犯罪の引き金となった物語である。しかも、殺されたのが、『砂の器』の三木謙一と同じく善人であって（もと娼婦の女である）、しかも地方の実業家として成功し篤志家としても知られている男に、ただ感謝の気持ちと、とくに懐かしさから会いに行って殺されるというところも似ている。感謝というのは、かつて男が女に金をやったことがあるからである。その金は犯罪と絡んだ金であったが。恩恵を受けたのと恩恵を施したのとの相違があるが、『砂の器』と『飢餓海峡』とは、ともに忌まわしい過去の抹殺としての犯罪の話という点、また、戦後の動乱期の中で別人になって出世していった男の物語という点においても、よく似ている。

おそらく、こういうふうな話は決して特殊で例外的なものではなかったと思われる。もちろん、その種の犯罪が頻繁にあったということではなく、先ほどの立身出世の話に関わらせて言うと、社会的に下層の人々や学歴エリートではなかった人々が、立身出世しようとするなら、たとえば戦中戦後のような社会的な動乱状態でも無いかぎり、社会的に上昇するチャンスが極めて少なかったということである。逆に言えば日本近代の社会は意外に階層制というものが確固としてあったということである。この二つの小説はそのことをよく表していると言えようか。また、階層制だけではなく、近代日本の社会は厳しい差別社会でもあった。その内の一つにハンセン病に対する差別がある。だからこそ、和賀英良は三木謙一の出現に動転

したわけである。

ただ、小説ではハンセン病の問題については、この作品ではあまり書き込まれていない（映画では遍路姿で流浪する父と子の姿が哀切感あふれる感動的な映像になっていたようだが）。『砂の器』が書かれたのは、一九六〇年から一九六一年である。一九六〇年には、WHOの専門部会がハンセン病患者の管理は隔離ではなく、外来治療で行なうよう勧告していたにもかかわらず、またハンセン病が伝染性の弱い病気であることがわかっていたにもかかわらず、かつ政府の責任者もそのことを知っていたにもかかわらず、日本政府はその後も隔離政策を続けたのである。国の政策が人々の差別意識を助長させていたのである。

国のその責任を始めて問うた国家賠償請求訴訟の判決が下されたのが、二〇〇一年五月の熊本地方裁判所での裁判であった。WHOの勧告から約四〇年以上も後である。一九〇七年の法律「癩予防ニ関スル件」が制定されてから国は一貫していわば隔離絶滅政策を取り続け、たとえば各地方では無癩県運動というのが行なわれたりしている。これはハンセン病者を密告して強制的に収容するというもので、『砂の器』の三木巡査は、善意と親切心から本浦千代吉を小説では岡山の慈光園—これはよく知られている愛生園のことかと思われる—に入園させるが、しかし、その行為の背景には国の強制的隔離政策があったわけである。

社会的差別というのは人々の偏見を土台にしてもいるが、むしろ政治がその偏見を助長したり、時には利用したりすることによって、ますます差別は酷いものになっていくのだと考えられる。驚くのは、外来治療に反対して隔離政策をあくまで主張したのが、収容施設の所長たちであったということである。彼らはハンセン病が伝染性の弱い病気であることをよく知っていた医者でもあったのに、である。残念ながら、彼らも偏見と差別を助長した人たちであったと言わなければならない。また、その差別は患者本人だけでなく、患者の家族にも向けられるものだったことは、たとえば徳永進が患者からの聞き取りをした『隔離　故郷を追われたハンセン病者たち』[16]のルポルタージュにも、患者の口から語られている。その内の一人は、「この病気はつらい病気です。病気にかかった私らは仕方がないにとしても、病気でない身内までが世間の白い眼でみられるでしょ」、と語っている。もう一人は、「この病気にかかると家族ぐるみでその苦しみを背負いますからね」、と語っている。もちろん、それは家族も差別と偏見を背負うということである。

こうしてハンセン病の問題を見てくると、和賀英良すなわち本浦秀夫が出世栄達の道を歩んでいただけに、三木巡査の登場に驚愕して殺人に及んだというのも、その心理が一切書かれていないわけであるが、理解できなくはないと言えようか。ついでに言うと、もしも和賀英良の内面が書き込まれた小説であったなら、たとえば経歴を詐称した時の思いはどういうものだったか、成り上がって行く中で、子煩悩で自分を可愛がってくれた、ハンセン病者であった父の思い出が甦ることもあったであろうが、それはどんなふうにか、どういう時にか、そして出世している今の自分を自分ではどう感じて

いたのか、三木謙一が目の前に現われたときの衝撃はどうだったのかなどが、もしも書き込まれていたならば、『砂の器』は本当にすごい小説になったと思われる。さすがの清張もそこまでは書ききれなかったのであろう。

四

さて、ハンセン病に対しての日本国家の酷い政策、そしてハンセン病をめぐる社会の差別、偏見の問題は、これはハンセン病だけではなく、日本の近代社会にある多くの差別の問題と繋がっていると思われる。それはまた、日本の近代社会の根幹に関わる問題であったと考えられる。歴史学者のひろたまさきは、『差別の視線　近代日本の意識構造』の中で、明治維新以後、日本国家は「一君万民」体制によって国家体制を整備していったのであるが、「万民」と言う以上、一見平等が行き渡る体制のように見えるが、同質化に反する者は排除するということが含意されていたとして、次のように述べている。

……「一君万民」の理念は華族以下を「万民」として寛大に包摂しながら、「世界無比の万世一系の皇統」を頂点とする血統秩序が日本型華夷意識の再生、そのもとでの「被差別部落民」「アイヌ」「沖縄人」への差別意識の再生を許すことになる……[17]

血統観念の中心は言うまでもなく天皇家であるが、それにもとづく同質性の強調による「一君万民」体制は、様々な排除と差別を生んできたというわけである。ひろたまさきはハンセン病の問題には言及していないが、ここにハンセン病者を加えることができるであろう。一九三一年に「癩予防法」が〈改正〉されるが、この年は満州事変が起こった年である。この〈改正〉は、戦時体制に向けての「民族浄化」の思想から出てきたものであった。この法律は、患者への差別、排除に留まらず、究極的にはその撲滅を意図したものであるが、残念ながら私たちの社会は、このような差別と排除の構造を内包した社会だったのである。そして今なお、この差別と排除の問題を克服しているとは言えない。私たちの社会は、和賀英良が生きた時代の問題をまだ引きずっている。それは日本の近現代社会における根幹の問題である。

ところで、では、あの立身出世の問題はどうなったであろうか。たとえば一億総中流ということが言われた一九八〇年代には、立身出世という考え方自体が〈ダサイ〉ものとして感じられたであろう。おそらく今の若者にとってもそうだと思われる。たぶん、高度経済成長時代の終焉の頃にはそういうエートスはほとんど日本社会から消えたと思われる。『砂の器』はちょうどその頃（一九七四年）に映画化され、多くの観客を動員したのであるが、まだ当時は観客はそのエートスを了解することができたと言えよう。もちろん、ハンセン病をめぐる差別の問題も厳然とあって、そしてそれはその後も続いている。

このように見てくると、『砂の器』は、日本の近代社会の多くの人々の欲望であり、同時に日本の近代社会の基本的なエートスであっ

た立身出世の問題を扱っていること、またもう一つ日本の近代社会のアキレス腱である差別の問題をも扱った、単なる推理小説に留まらない問題小説の側面を持っていると言える。

さて、まだ取り残した問題がいろいろとある。たとえば『砂の器』は推理小説として見た場合はどうなのか。推理は不自然ではないか、推理の面白さはあるのかというような問題もあるであろう。それについて述べると、『砂の器』の面白いところは、最初の推理、というよりも当て推量が外れるところである。たとえば、「カメダ」が秋田の羽後亀田ではないかと思い、今西刑事は現地まで行くのだが、その当て推量は外れていた。また、三木謙一の上京の切っ掛けは上映されていた映画に関係あるのではと思い、苦労してそのフィルムを見るが、これも外れていた。三木謙一は怨恨がもとで殺害されたのではないかと当て推量するが、三木謙一は仏のような善人であった。他にも蒲田の近くに犯人のアジトがあるのでは、というやはり外れた当て推量もあった。

もちろん、やがて真相に突き当たるのだが、この当て推量―検証の過程を重ねることで真実を突き止めるというのは、おそらく推理の常道だと思われる。記号論のシービオク夫妻は『シャーロック・ホームズと記号論』の中で、記号学者というよりも万能の学者と言っていいチャールズ・パースが「推測的帰納推理」と言っているのは、この当て推量―検証のことであり、実はシャーロック・ホームズの推理もそうであると述べている。[18] ホームズの場合、天才的推理というふうに思われがちだが、実は凡人と変わりなく、ホームズも当て推量から出発するわけである。ただ、当て推理―検証の過程が速く、かつ、たいていの場合頭の中で検証もやってしまうところが、ホームズの優れているところだが、推理の在り方の基本は同じなのである。当て推量である。『砂の器』は、シービオク夫妻が読めば喜びそうな、まさに推理のお手本のような小説であると言えるかも知れない。そういう面白さもあるであろう。

また、和賀英良の音楽であるミュージック・コンクレートの問題もある。これについては安智史が「音楽殺人の時代的過程―菊池寛大衆長編小説から松本清張「砂の器」へ」[19]で詳しく論じていて、とくに付け加えることはないが、これまでの話と関連させれば、この前衛音楽も和賀英良の出世主義と関わるものと言えよう。つまり音楽界の中で若く新しい音楽家が出世するための戦略の一貫として、ミュージック・コンクレートが選ばれているようだということである。ヌーボー・グループの連中は既成芸術を手厳しく批判し、自分たちの芸術やその思想との差異を強調するが、ピエール・ブルデュー的に言えば、[20] 差異を主張することによって〈界〉内での上昇を狙ったものと言えようか。

こうして見てくると、『砂の器』は非エリート階層から出発した若者の出世願望と挫折の物語であったと言うことができるであろう。もちろん、差別の問題とも深く関わった物語でもあった。

二〇〇四年にこの話がテレビ化された。おそらくバブル期ならばそういうことはありえなかったであろう。ここ数年、経済学者たちによって日本が新たな階級社会に突入したということが言われ、話

題になった。[21] 社会の階層、階級の壁というものが、人々とくに若者たちに切実に実感されるような社会になってきたからこそ、『砂の器』の悲劇が再びリアリティのある話として受け入れられるようになったのかも知れない。

注 (1) 松本清張の文章からの引用は、すべて『松本清張全集』全五六巻（文藝春秋社、一九七一～一九八三）に拠る。

(2) 斎藤道一『名探偵松本清張氏』（東京白川書院、一九八一）。

(3) 平野謙「『断碑・装飾評伝』〈講談社、一九七二〉解説。

(4) 伊藤整「近代日本人の発想の諸形式」（一九五三）、のち『小説の認識』（河出書房、一九五五）所収。

注 (3) 参照。

(5) 見田宗介『現代日本の心情と論理』（筑摩書房、一九七一）所収。

(6) 見田宗介の文章からの引用は、同書所収の論文に拠る。

(7) 太宰治「思ひ出」からの引用は、『太宰治全集』第一巻（筑摩書房、一九八九）に拠る。

(8) 竹内洋『立身出世主義　近代日本のロマンと欲望』（NHK ライブラリー、一九九七）。

(9) 竹内洋『立志・苦学・出世』（講談社現代新書、一九九一）。

(10) ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』（石井洋二郎訳、新評論、一九八九・一九九〇）参照。

(11) 竹内洋『（日本の近代12）学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、一九九九）。

(12) 桑原武夫『「宮本武蔵」と日本人』（三省堂新書、一九六四）参照。

(13) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』（岩波書店、一九九五）参照。

(14) 注 (8) 参照。

(15) 注 (11) 参照。

(16) 徳永進『隔離　故郷を追われたハンセン病者たち』（岩波現代文庫、二〇〇一）。

(17) ひろたまさき『近代日本の意識構造　差別の視線』（吉川弘文館、一九九八）。

(18) T・A・シービオク、J・ユミカ＝シービオク『シャーロック・ホームズの記号論』（富山太佳夫訳、岩波現代選書、一九八一）参照。

(19) 安智史「音楽殺人の時代的過程――菊池寛大衆長編小説から松本清張「砂の器」へ」（第一回松本清張研究奨励事業報告書、二〇〇〇）参照。

(20) ピエール・ブルデュー『芸術の規則Ⅰ・Ⅱ』（石井洋二郎訳、藤原書店、一九九五・一九九六）参照。

(21) 橘木俊詔『日本の経済格差――所得と資産から考える』（岩波新書、一九九八）や佐藤俊樹『不平等社会日本　さよなら総中流』（中公新書、二〇〇〇）などを参照。

付記・本稿は二〇〇四年六月に明治大学で開催された第一〇回松本清張研究会での発表を纏めたものである。発表後の質疑応答では、金綱久夫氏、仲正昌樹氏をはじめ参加者の方々から貴重なご意見をいただいた。記して感謝申し上げる。

（あやめ　ひろはる、ノートルダム清心女子大学）